

随想

街路樹

会員 市野 兼 仁

今日はお彼岸で、朝からどんより曇りがちのお天気であつた。自転車であつたこと好きを私は、街路樹を見ても廻ることにした。

国道二一七号線のバイパスに、一キロメートルほどつづくワシントンニヤは、植えられてもう四年目の春を迎えた。狭い歩道に一年中大きな葉を上げていたので、さけて通らねばならないほど威勢がよい。

新興住宅地となつた城南区のプラタナスの並木は、道路完成と同時に植えられてやつと一年たつてゐる。二メートルほどある木にはまだ枝も葉も少なく、四五百メートルほど続いているだけで寂しい。

街の中央通りにある柳の街路樹は、大手前から駅前まで約二キロメートルほど続き、もう二十年ほどになる。昨年の秋、せんていしたので雨に濡れた黒い幹には、まだ枝も葉も少なく、行きこう人は見玉きもしない。所は悄然としている。それでも取に近づくとつれて、樹は大きくなり、細い枝には若芽が吹き出し、春の息吹きを感じさせられる。

興人の住宅を真中に通る広い道路には、メタセコイヤ

の並木が二百メートルほど続く。近づかないとまた若芽は見えないほどであるが、無数の小枝が手を広げて、十年ほどたつた水の本一本が天をつき、すがすがしい。付近一帯は林のように静かだ。
ここは佐伯には珍らしく異國風の所で、私は好んでこの道をよく通る。

佐伯市の街路樹は、古いもので昭和三十年頃植えたもので、まだ歴史が浅い。樹は年輪の重なつたものほど人々に潤いを与え、心を落着かせてくれるものだ。市内には四ヶ所に四種の街路樹が植わつてゐる。それぞれが年令を経て、それぞれの場所にふさわしい樹を選んでゐるが、場所によつては、花の咲く街路樹もあつてよいのではなかろうかと思つたりした。

— NIKK 「くらしのたより」投稿・放送ずみ —

賞書

長瀬津留周辺の物語

城南区 河野 典 一

(一) 木立から船で通学

小学生が橋をこいで、木立村から舟で佐伯まで毎日通学した話である。

佐伯高等小学校は今の佐伯小学校の敷地にあつて、佐伯町・鶴岡村・木立村の組合立であつた。木立村の児童は数人で組をつくり、舟道から小舟に乗って、交代にこぎながら茶屋が舟をめぐり、佐吉浜に舟を着けて通学して

いた。暴風雨の折などは一苦勞したとと思われる。

(一) 長瀬大根の売り場

明治の頃「長瀬大根」は久都半夢、地崎人、木立藩、難上荷積み——と云われて、今の城南区一帯の地は砂質壤土のため、大根の産地であつた。

渡し舟が常時あつて、現在が西田渡、三麻塚前の広場が札場と云われ、渡し舟の發着場であり、長瀬大根は船からおろして広場に並べ、毎日売りさばいたものである。舟内が註文は配達するが、田舎へ売れたのは此處で、荷馬車、荷車、ビロ籠の人に引渡す。大根は長瀬の専売品の觀があつた。

(二) 池船橋下の飲食店

上浦方面の卸し船は、諸木橋から水正橋の間に着いたが、中浦・下浦方面は池船橋から住吉浜に着いた。岸壁にはバラック作りの飲食店が十数軒立ち並んで、ウドン・ソバ・ソーメン・氷・アメ湯・煮付・菓子類を売つて賑わつた。

(三) 難の上荷積み

夜が明けてしばらくすると、朝霧をいつて池船橋の下に、十数隻の難の上荷積船が姿をあらわして賑わう。皆夫婦の二投格である。この船が土蔵屋に着いて、夫婦連れで木炭を擔ぎ込む。

木炭を積んだ船は、離れ帰つてから海上に待っている。大根通いの千石船に木炭を移すのである。

土蔵屋には高島坂本・水許・川野・戸坂の、五軒の木炭問屋が並んであつた。此の五軒が揃つて名士で、下流から県会議長坂本惣五郎、鶴岡助役水許藤吉、県会議員川野

弥五郎、郡会議員、後名護村長戸坂岩太郎という、名士の集會であつた。

(四) 白魚取り

池船橋から天神津留の間は、白魚とりの網代が二十歳が所あり、冬期十二月から三月末迄、長瀬の人達が毎日出漁する。最も漁獲量の多い河野吉五郎さんの網代では、一か年中の一家の入費を賄う程取れて居たと云われた。漁具・漁法は日本中何処にもない、長瀬独特のものであつた。

(五) 耳切れ虎やんの事

覆轆ひく三味弾くチンバひく、山じや木挽さんが椒をひく、百姓は馬取く牛も曳く、芸者さんは虎やんのお手を引く、ヤートマンヤ
虎やんは四十才位、背の高い、片耳の切れた男であつた。毎年佐伯の春祭りには、虎やんは必ず大日寺の山門に登り、唱いながら踊ることが佐伯春祭りの名物として所の人々を喜ばせていた。

大正三年の即位の御大典と、同五年の鉄道開通式には春祭り同様、山門の階上に登り人々を喜ばせた。

七、亥の子

十月の亥の子には、山でも里でも餅を搗くとの歌聲にあわせて、子供たちが御影石で楕圓形の石に鉄の銚巻、それに子供の数だけ綱をつけた亥の子石を、村中の家々を廻つて、庭に穴をおけるほどついで餅を貰つて歩いた。この風習は長瀬独特のもので、よその部落は皆葉栗搗きであつた。その石は今も天神塚の床下に、ほこりとがぶつて置いてある。

い 神輿を、兵児帯で繫ぎ止める

百七十年程前の昔、今の城南の地から長瀬部落が、天神津留に移転した時、一夜にして出水、水が若宮八幡宮の神輿が流水かかった時、時の長瀬庄屋は突差の場合とて、兵児帯をまつて神輿を繫ぎとめて、決死を防ぐことか出来た。それ以来、長瀬の庄屋の参着なくば、神輿のお立ちがなかつたと伝えられた。

明治の頃は若宮八幡の御旅所は一本松河原であつたが、昔は天神津留に御神幸のこともあつたまゝと思ふ。

七 殿様が、粟方庵にお出でになる

弘化、嘉永の頃、陸奥のよく出来た庵主が、粟方庵(長瀬にある庵、水庵とも呼ぶ)に居り、時の殿様(十二代高松公)の知造を接待、時々殿様が遊ばにお出でになつていた。長瀬の住民は道に蓮を敷いて、平伏してお迎えした由である。この話は天保、弘化生まれの人から、よく聞かされたものである。

此の庵主の墓は、長瀬から大内に通ずる墓地にあり、墓石は別格詠えの無縫塔で、「當庵中興法山禪修首座」嘉永六年段、殿河沼津石田村の庵と記されてある。

(6) 天神津留の闘牛

天神津留で闘牛があつたことを記憶する。明治三十五年の事と思われるが、今の家畜市場の所である。

高い田形の横敷が出来て、近郊からの見物人は、美しい蓮を持って来て、それに坐つて見物する。印入りの着物と着けた大小の牛が、その大きさにより組合され、組の突き合いをして時間かたつと弱い方が逃げ出す仕組んである。善賢寺の前の鵜島と共に、随分面白かつた。(終)

読書

黒澤の民俗行事

会員 多田 太郎 吉 (七十七才)

一 盆行事

精霊棚 まちまちである、精霊流 十二時より夜明けまで

盆踊

但し昨年以青山青年団の主催で、婦人会を以て、青山地区一般民の役員で新法道に一般総供養踊を、青山小学校々屋で思ふは行われ

二 お日待

黒沢部落全部している。

三 庚申待

明治、日出光両部落がしている。

四 二十三夜待

していない。

五 お伊弉諾

伏水川、市野々がしている。

六 地藏祭

黒沢全部している。春秋二回。

七 お山講(石鏡神社)

日出光部落がしている。

八 観音講(伊豫山石寺)

小字山、日出光、桐、三部落共同で毎年春二三人参り、帰つてから三部落の方々が庵に参り、庵主さんと共にお終きあげ、終つて賑やかにお祭りを行います。

九 早吸日女神社講(西の浦)

大部分している。

十 金毘羅米

まちまち。

十一 山神祭

全部落している。山神祭には異つた祭り方もあり、万治、日出